松浦武四郎の旅はここからはじまった

幕末から明治維新を生き、「北海道の名付け親」となった松浦武四郎の実家にあたる場所で、昭和37年（1962年）11月15日に三雲村が史跡に指定しました。

誕生地の前の道は「伊勢街道」といい、南に行けば伊勢神宮へ、北へ行けば四日市の日永で江戸と京都を結ぶ「東海道」につながり、古くから多くの「おかげ参り」の旅人が行き交った道でした。

この道を歩く旅人は、武四郎が13歳の頃に起こった「文政のおかげ参り」で、1年に400～500万人に上ったとされ、武四郎は街道を歩く多くの旅人に刺激を受け、旅を志すようになっていったと考えられます。

武四郎にとって、生まれ故郷の我が家であり、今も武四郎の旅を語る上で重要な場所であるとともに、伊勢街道の宿場町として賑わっていた頃の建物の様子を知る上でも貴重です。

現代にいたる生活の中で増改築が重ねられてきましたが、松阪市では武四郎が生誕200年を迎える平成30年（2018年）2月に合わせて、史跡整備を進め、明治維新直前に作られた家相図に基づき、武四郎が生きた時代の建物構成である、「主屋」、「離れ」の保存修理と、土蔵2棟、納屋の補強工事を行いました。

※松浦 武四郎（まつうら たけしろう 、1818～1888）

江戸時代後期の文化15年（1818年）に三重県松阪市小野江町（当時は伊勢国一志郡須川村）で生まれ、17歳から全国を巡る旅に出て、明治21年（1888年）に71歳で亡くなるまで、沖縄以外の日本各地を歩いた「旅の達人」とも言える人物です。

幕末にロシアとの緊張関係にあった蝦夷地（今の北海道）を6回にわたり探査し、その成果として詳細な調査記録と地図を残したほか、明治維新には、政府で開拓使の判官を務め、北海道の名前につながる道名や国名・郡名などの撰定に携わったことから、「北海道の名付け親」と呼ばれています。

交通のご案内

誕生地前の道路は細く、駐車場も限りがあります
松浦武四郎記念館からは500m（徒歩約7分）ですので、歩いてご散策ください

電車で

名古屋より　名古屋　近鉄特急 60分　近鉄伊勢中川駅　東口からタクシー 7分　松浦武四郎記念館

大　阪より　上本町　近鉄特急 1時間20分　近鉄伊勢中川駅　東口からタクシー 7分　松浦武四郎記念館

※伊勢中川駅東口から平日のみ三雲地域コミュニティバス「たけちゃんハートバス」（10人乗り）を運行。松浦武四郎記念館下車すぐ。

車で

伊勢自動車道 久居インターチェンジより 10ｋｍ 15分

※大型バスで中勢バイパスを利用してお越しいただく場合は、「舞出ランプ」ではなく、必ず「嬉野新屋庄ランプ」からお越しください。

開館時間　午前9時30分から午後4時30分

入館料
- ●松浦武四郎誕生地
  一般（19歳以上）　100円（20名以上の団体は80円）
  ※18歳以下の方は無料です
- ●松浦武四郎誕生地＋松浦武四郎記念館（博物館）
  （博物館との共通入館券）
  一般（19歳以上）　350円（20名以上の団体は250円）
  ※松浦武四郎記念館は6歳以上18歳以下の方は有料です（200円）

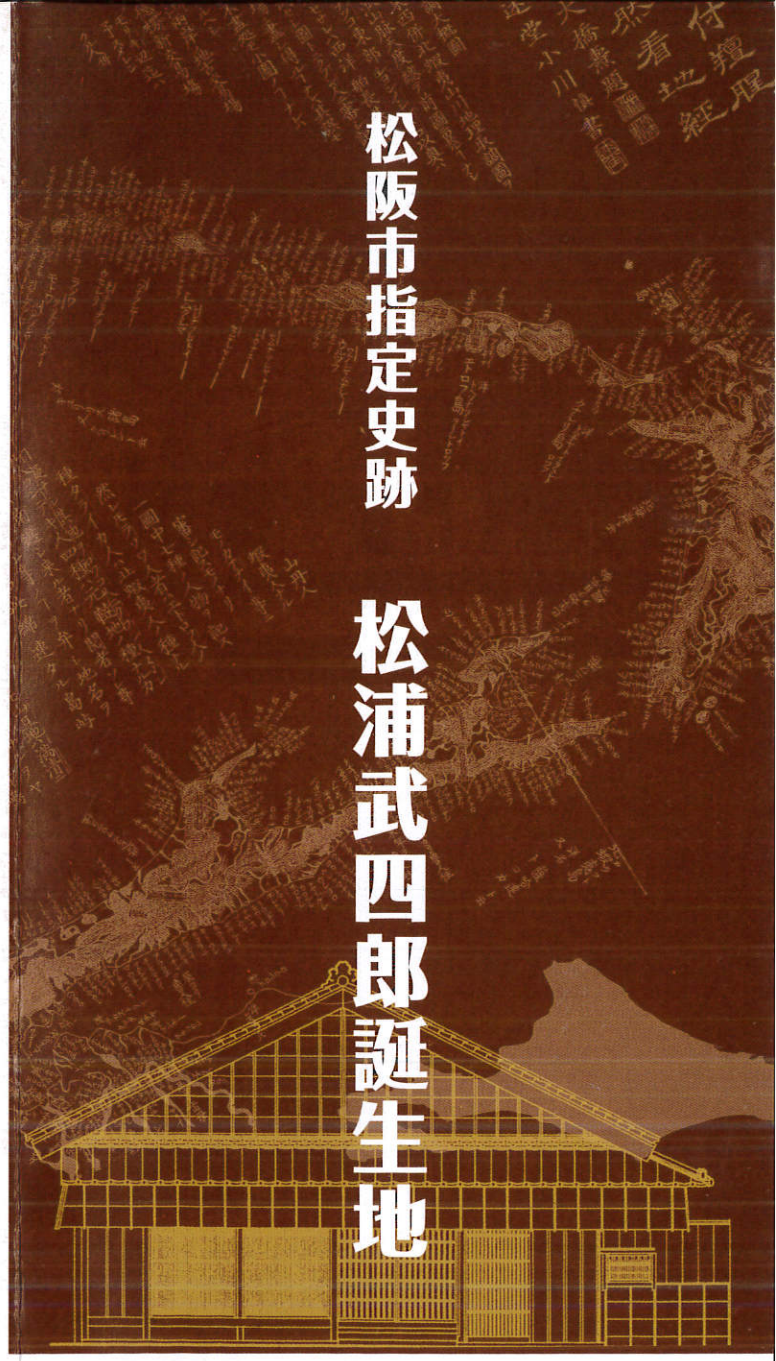
休館日　毎週月曜日（祝日にあたる場合は開館し、翌火曜日を休館）
祝日の翌日（土日にあたる場合は開館）
年末年始　（12月29日から1月3日）
※上記のほかに臨時休館する場合があります

松浦武四郎誕生地

〒515-2109　三重県松阪市小野江町 321
TEL 0598-56-6847　FAX 0598-56-7328
※電話・ＦＡＸでのご連絡は、松浦武四郎記念館でお受けいたします
https://takeshiro.net　松浦武四郎記念館　検索

松阪市指定史跡

松浦武四郎誕生地



Matsusaka city historical site
The birthplace of the Matsuura Takeshiro

松阪市指定史跡　松浦武四郎誕生地

Matsusaka city historical site "The birthplace of the Matsuura Takeshiro"

土蔵 一（どぞう いち） Earthen storehouse　土蔵 二（どぞう に） Earthen storehouse

明治時代に建てられ、長らく武四郎に関係する資料が多数保管されてきました。

土蔵で保管されていた武四郎関係資料が当時の三雲町に寄贈されたことにより、平成6年（1994年）に松浦武四郎記念館が開館しました。

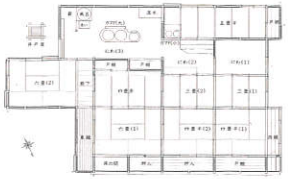
主屋（しゅおく・おもや） Main house

松浦家の生活の中心となる建物で、武四郎の父・松浦時春には末っ子であった武四郎のほかに、三人の子どもがおり、武四郎の兄・佐七が家督を継いでからは、武四郎の父母や、兄・佐七の家族が暮らしてきました。

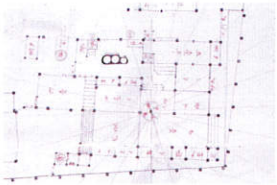
武四郎は16歳から家を出て江戸へ一人旅をした後、17歳から日本各地を巡り歩き、19歳で四国八十八か所を巡礼、20歳で九州へ渡り一周しています。

はじめは中国やインドへ行こうとしましたが、鎖国のため断念し、長崎で蝦夷地（今の北海道）の危機を知り、26歳で9年ぶりにこの家へと戻りました。すでに父母が他界していたため、主屋の仏壇に手を合わせ、四国や九州の旅行記をまとめた後、27歳で再び家を後にして蝦夷地へと向かいました。

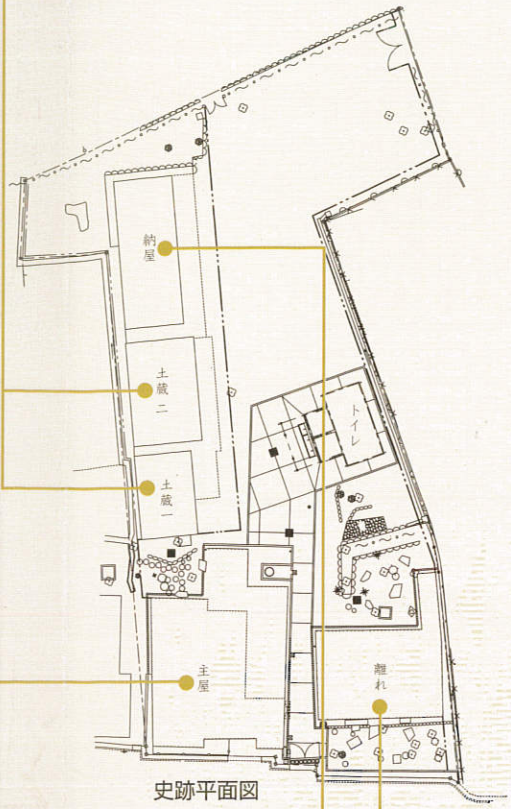
ほとんどの部分が建築当初のままでしたが、後に住みやすいよう増築・改築が繰り替えされてきたため、保存修理を行う際に「かまど」など家相図に基づいて武四郎の生きた時代の姿に一部復元をしています。



主屋平面図

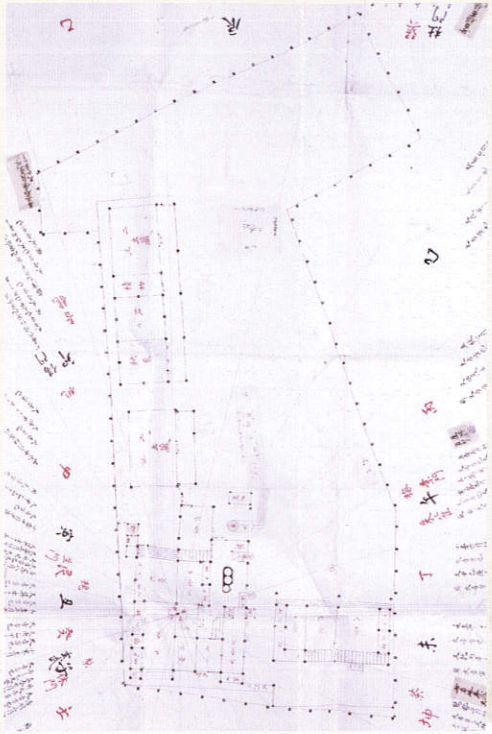


家相図（主屋部分）



史跡平面図

※土蔵 一・土蔵 二・納屋は内部を公開していません



幕末に作製された家相図

納屋（なや） Barn

農具や釜、桶などのたくさんの生活道具が収納されており、かつては運んできたお米を保管しておく場所でもあり、米蔵とも呼ばれました。

北海道の名付け親
松浦 武四郎
（1818～1888）

離れ（はなれ） Guest house

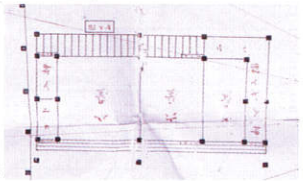
武四郎の実家を訪ねて来たお客さんをおもてなしする場所として、慶応3年（1867年）頃に完成しました。

当時、武四郎が新築祝いとして、著名な画家や書道家が寄せ書きをした戸袋の襖絵を贈っている（記念館で保管）ほか、離れの庭には、明治維新に開拓使で判官を務めた武四郎が建てた灯篭があります。

現在の建物は家相図と間取りが異なっており、大規模な改修を行った痕跡が確認されています。

離れ平面図

※建物は貸切でもご利用可
（要予約・使用料）



家相図（離れ部分）